「読書人」 2012. 2/17 (金)

ジャン＝クレ・マルタン著

フェルメールとスピノザ

〈永遠〉の公式

四六判・108頁・1890円
以文社
978-4-7531-0296-9

秘められた親交を推理

哲学と絵画の共通点とは

加國尚志

ヴァレリーは、オランダから帰る汽車の中で、デカルトとフランス・ハルスの会話を空想した。たしかにハルスはデカルトの肖像画を描いているのだから、二人の間に何らかの会話があったことはまちがいない。当時のオランダを代表する哲学者と画家の知識の交換はどのようなものだったのか。光学や解剖学といった共通の話題には事欠かなかったはずである。歴史的資料が欠けていることは、私たちの想像力を刺戟する。

ドゥルーズ論やゴッホ論で知られるジャン＝クレ・マルタンの新著は、フェルメールとスピノザの秘められた親交を推理する。フェルメールの『天文学者』のモデル、あれはスピノザだ、というのである。マルタンの提出する論拠を挙げると種明かしになってしまうが、「天文学者」の容貌、二人の共通項としての「レンズ」、そして「自己原因としての神すなわち自然」の説からして、永遠は外部にではなく属性としてのおのおのの身体のうちに存在すると考えられねばならない。「コナトゥス」の思想は、おのおのが永遠を欲望し、その創造的様相を高揚させることによって、私たちに永遠を把握するまなざしを手に入れさせる。

スピノザの知的直観を「芸術的直観」として解釈したのはドイツ観念論のシェリングであるが、スピノザの哲学が幾何学的秩序による論証を用いながら、自己原因としての神すなわち自然、属性としての身体の能動的な力の増大、三種の認識の頂点としての「永遠の相のもとに見る」という直観のありかたと切り離せない知覚を提示していることが頭から離れなくなる。私たちは、フェルメールの作品に「永遠の今」を見る喜びを感じるが、それはまたスピノザ思想の精髄にあるものなのだ。推理小説を最後から紹介するようなことをしてしまったが、マルタンの軽妙な筆づかいをわかりやすく伝える翻訳とあいまって、フェルメール展を見に行く前に気軽に手に取ってみたいしゃれた哲学書である。

ドガは若き日のレオン・ブランシュヴィックに「スピノザを5分で説明できますか?」と尋ねたそうだ。彼が何と答えたかはわからない。だが「スピノザの永遠とは、フェルメールの描くところのものでして」と答えたなら、ドガはあごに手をあてて「ほう!」と言ったことだろう。(杉村昌昭訳)(かくに・たかし氏＝立命館大学教授・哲学専攻)

★ジャン＝クレ・マルタンはフランスの哲学者・小説家。著書に「ドゥルーズ／変奏」「物のまなざし」など。一九五八年生。

「天文学者」のモデルは スピノザではない

「永遠」に関心をもつ 極上の思索エッセンス

二人の哲学者の出会い、そして一生の絆。 二人の秘められた 透明に肉薄する